



Title	「文化」の解釈(15) : 文化と翻訳 はしがき
Author(s)	
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2015, 2014
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/51824">https://hdl.handle.net/11094/51824</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## はしがき

ここに刊行するのは、「言語文化共同研究プロジェクト 2014」の一環として、「〈文化〉の解読 (15) -文化と翻訳-」という名称の下、合計 4 名によって行なわれた共同研究の成果報告書である。メンバーのうち、3 名は大学院言語文化研究科に所属する教員、1 名は大学院言語文化研究科博士後期課程の学生である。

「〈文化〉の解読」をメインテーマとする共同研究プロジェクトは 2000 年に発足した。過去のサブテーマは以下のとおりである。「文化の意味作用について」(2000 年度)、「〈文化空間〉の政治学」(2001 年度)、「文化の政治性／政治の文化性」(2002 年度)、「文化批判の機能をめぐって」(2003 年度)、「文化生産の諸相」(2004 年度)、「文化受容のダイナミクス」(2005 年度)、「システムとしての文化」(2006 年度)、「想像力としての文化」(2007 年度)、「文化とアイデンティティ」(2008 年度)、「文化と身体」(2009 年度)、「文化とトポス」(2010 年度)、「文化と歴史／物語」(2011 年度)、「文化とコミュニティ」(2012 年度)、「文化と公共性」(2013 年度)。15 年目となる 2014 年度は、「文化と翻訳」というテーマを掲げて、本プロジェクトを遂行した。

収録した 4 本の論文の内容は、以下のとおりである。アウマン論文は、荘子のある物語のいくつかのドイツ語訳を比較・吟味し、中国や日本における古今の注釈をふまえて、独自の翻訳の提案をしている。阿部論文は、EU における司法通訳・翻訳の共通水準確立の過程の中で、ドイツの司法通訳人・翻訳人認定制度がどのような発展を遂げたのかを総合的に論じている。津田論文は、村上春樹の短編小説におけるミザナビーム手法（物語の中にそれと類似関係を持つ別の物語を入れ子として組み込む手法）を分析し、それが小説全体のテーマ内容を寓意的に示すのに効果的に用いられていることを指摘している。宮崎論文は、ポーランドの芸術家ミロスラフ・パウカによるビデオ・インスタレーション「BlueGasEyes」(2004) とパウル・ツェランの詩との関係を分析し、美術作品と詩がホロコーストの記憶をめぐる問題をどのような形で提示しているのか考察している。

本冊子が、文化研究の発展の一助となれば幸いである。

2015 年 4 月

執筆者一同